

選・文 = 石井翔大

写真 = ①⑩：小松崎常夫、⑳：大江新、その他：石井翔大

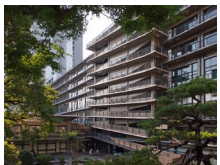
ここでは比較的容易に見学できる大江建築を主に取り上げた。これら二〇作以外にも、福岡県立大濠公園能楽堂や富山県入善町民会館、三溪記念館、大塚文庫など、身近に触れえる建築は複数存在するが、大江を知る上で押さえるべき代表作はほぼ網羅していると言つてよい。

ただし、大江は生涯にわたり住宅を手掛けた建築家でもあった。キャリアを概観すると公共建築の設計が目立つが、確認されている住宅作品は二九作のほり、処女作と思われる住宅・大串邸が昨年発見されたことは記憶に新しい(参照『住宅建築』2014年10月号)。

発見される建築がある一方で、失われる建築も少なくない。ここ数年で丸亀高等学校、尾崎弔堂邸が解体され、今回の②③⑩も既に建て替えが決定している。いずれも価値ある建築だが、特に②は、三年にわたる設計期間中に生じた大江の内なる葛藤が、55年館と58年館との間に様々な差異として現れ、興味深い事例である。ぜひ一度足を運んでほしい。この一覧が、歴史の露頭として現在する大江建築に触れさきっかけになれば幸いである。



▼①中宮寺御厨子(1968)奈良県生駒郡斑鳩町)大江二七歳の作。屋根の艶やかな曲線、柱の繊細なプロポーションが、後の大江建築を予告する。自邸の居間中央には御厨子の写真が飾られていたという。大江にとって、日々立ち帰るべき原点であった。



▼②法政大学55/58年館(1955/58)東京都千代田区)外濠に面した端正なカーテンウォールの正面に対し、裏面はブルータルな表情を見せる。近代建築への疑念が、南禅寺をモチーフとする学生ホール、和風庭園として現れる。日本建築学会賞作品賞。



▼③第一三木ビル(1957)東京都中央区)モダニズムを直接的に志向した最後の作品。短手二スパンの平面計画に対し、立面の柱割を四スパンとすることで、繊細な佇まいを実現。エントランスを彩るマイル壁面のデザインは大江自身が手掛けた。



▼④梅若能楽学院(1961)東京都中野区)大江による初の能楽堂。自然光が差し込む能舞台は、かつて野外でなされた能の面影を湛える。後の作品で、相互に関係を持ちながらも分離・対置されるRCと木は、ここで直に接触し、一体化している。



▼⑤乃木神社(1962)東京都港区)域性を高める回廊、縦方向への意識が強い架構、部分を構成する諸材の木割など、後の作品にしばしば現れる要素が認められる。境内には父・新太郎設計の手水舎も現存。一九八三年に本宅と⑩を繋ぐ儀式殿他が増築。



▼⑥追分の山荘(1963)長野県北佐久郡軽井沢町)大江家の山荘。母屋と所員寮からなる。繊細な柱と深い軒下には大江の美意識が体現される。所員寮のポリューム配置は大江が現場監理を担当したサンパウロ日本館(1954堀口捨己)を想起させる。



▼⑦法政大学62年館(1962)東京都新宿区、現・市ヶ谷田町校舎)大学の本質は講義でなく個と個の接触にあるとする大江の考えが、各階の中心を占める学生ホールに窺える。対角線状に交差する梁が空間に躍動感を与える。二〇〇八年に改修された。



▼⑧在日メキシコ大使館カサ・デ・メヒコ(1963)東京都千代田区)四枚のH.D.S.セルの大屋根が内外の空間を印象づける。柱は重厚かつ彫塑的表現が与えられ、浮遊する屋根とのコントラストが美しい。内部は障子や襖等、和の要素が盛り込まれた。

『PDF公開用カラー版』『建築と口遊』No.3-4 <http://kentikutonijou.web.fc2.com/no03.html>



▼⑨香川県立文化会館(1966)香川県高松市)RCの躯体と木の造作が主従の無い独立した系として対置。エントランスに貫入された櫓は内外を漸進的に繋ぐ。三階の外壁を傾斜させ銅板葺屋根を模したことで、社寺建築を思わせる外観となった。



▼⑩普通土学園(1966)東京都港区)八×八mを基本単位とする教室群が、二つの中庭を取り囲み重層配置される。各教室が円柱コロネードのバルコニー、渡り廊下等の中間領域により連続する有機的な空間構成。構内には他に二つの大江建築が建つ。



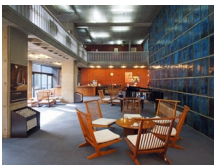
▼⑪乃木会館(1968)東京都港区)⑤に隣接した結婚式場。赤レンガのロビー棟とスタッコ仕上げのセレモニー棟がコアで接続される。地中海建築を思わせる外観とは対照的な和風の内部空間があったが、改装により既にその姿は失われた。



▼⑫マリアンハウス(1968)東京都調布市)修道会運営の女子学生寮。中庭を食堂、娯楽室、図書室等のコミュニティ空間が囲み、外縁に個室群が配される。ロマネスク風のポーチ、量塊的な壁面からクリアランスを設けて浮遊する方形屋根が特徴的。



▼⑬九十八斐院(1968)東京都小平市)当時九八歳だった彫刻家、平櫛田中の自邸。書院や母屋など五棟が渡廊により結ばれながら、前庭、中庭といった外部空間を作る。明暗の精緻な操作が間に変化を与え、平櫛田中彫刻美術館として公開中。



▼⑭東京讃岐会館(1972)東京都港区、現・東京さぬき倶楽部)現在も利用可能な宿泊施設。階段手摺や鉄格子など細部の裝飾が目を引く。本作前後から扁平アーチが主要な意匠要素に加わる。玄関からロビー、庭園へ至るプロセッションは②に通ずる。



▼⑮香川県立丸亀武道館(1972)香川県丸亀市)⑨で試みられた混在併存の手法がより高度に適用された。黒の木造作と白壁の対置が鮮烈な印象を与える。門から前庭、管理棟、中庭を介して道場へと至るプロセスが緊張感を高める。日本芸術院賞。



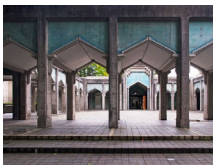
▼⑯伊勢神宮内宮神楽殿(1978)三重県伊勢市)原型に忠実に再建された神楽殿(明治期)、御饌殿(左、大正期)と、大江による新築部分(右)が併存。異なる時代背景を持つ建築群が調和を保つ。既存部に比べ、大江の屋根はしなやかな曲線を描く。



▼⑰角館町伝承館(1978)秋田県仙北市)角館の手工業である櫛細工の展示・販売施設。武家屋敷が建ち並ぶ重伝建地区の中心に位置する。敷地南東の門は、かつて角館を治めた佐竹北家の居館の門を大江が古写真から復元したもの。JIA25年賞。



▼⑱国立能楽堂(1980)東京都渋谷区)大江自身が詳細なスケッチを描きスタディを重ねた作品。斜めの軸線が全体を貫く。野物と化粧の関係、プロセッション、中庭と回廊、屋根による間積もりなど、大江の主要な建築要素が渾然一体をなす。



▼⑲角館町平福記念館(1988)秋田県仙北市)秋田蘭画の収蔵展示施設。イスラム風アーチの回廊が特徴的。サロン、展示室、収蔵庫が回廊を囲むように分散する。武家屋敷通りから大きくセットバックした配置計画により、景観への配慮がなされた。



▼⑳高山屋台会館(1988)岐阜県高山市)高山祭の屋台を展示、保存する施設。複雑に重層した屋根が、巨大な展示空間と周辺環境との調和を生んでいる。屋根頂部の櫓は、父・新太郎が死の床で描いた「建國二六〇〇年記念塔」の翻案とも思える。